

家 伝

清水章雄

一 成立と著者

「家伝」は上下二巻から成る藤原氏の伝記である。家伝という言葉葉は、もとは家の伝記という意味の普通名詞であったので、「藤氏家伝」とか「藤氏伝記」のように「藤氏」を冠して呼ばれもした。

上巻は、藤原鎌足の伝で「大織冠伝」と呼ばれ、下巻の藤原武智麻呂の伝を含めて、「大織冠伝」と総称されている。

旧伏見宮家旧蔵本とその系統をひく彰考館本には、藤原鎌足の子の貞恵の伝記が上巻末尾に付載されている。

「鎌足伝」の最後に

今別巻在り。二子貞恵、史有り。俱に別伝有り。

と記されていることから、史注5(藤原不比等)の伝記が「家伝」のうちに、以前はあったことが知られる。

下巻は、その不比等の長子で、藤原南家の祖、武智麻呂の伝記であることはすでに述べた。

上巻、「鎌足伝」の著者は「大師」と巻頭に記してあるとおり、太政大臣藤原仲麻呂(惠美押勝)であろう。大師が太政大臣の唐名であることは言うまでもない。「貞恵伝」も仲麻呂の手になるものだ

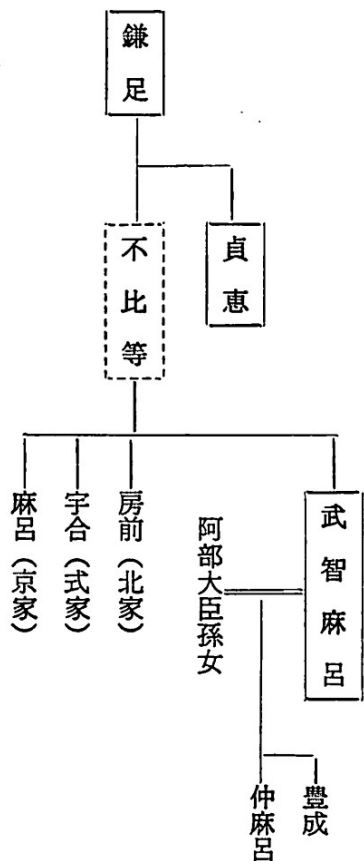
ろうと思われるが確証はない。

下巻、「武智麻呂伝」の著者は「僧延慶」と記されている。延慶は、鑑真注7和上の一行と共に薩摩の秋妻屋浦に、天平勝宝五年(七七三)に着き、大宰府や奈良で訳語として活躍した留学僧であろう。この延慶を、仲麻呂注8の六男刷雄や大唐学問生船連夫子と考える説もあるが確かなことはわからない。伴信友注10は

知逢が便蒙に、延慶は大安寺僧也と注へり。

と述べている。上巻の著者仲麻呂の家僧という推定が現在のところ妥当であろう。

藤原氏系図



「家伝」上下巻は、藤原仲麻呂とその周辺の人物の手になったということは確かであろう。「家伝」の成立には何より祖先の事績の顕彰という意図が強く働いているからである。

仲麻呂と鎌足、貞恵、武智麻呂、不比等らの関係を整理して系図に示せば先のようになる。

仲麻呂にとって鎌足は曾祖父であり、「藤原」氏の始祖である。鎌足は天智八年（六六九）に没している。貞恵は鎌足の長子、不比等の兄、仲麻呂の大伯父である。貞恵は天智四年（六六五）に二十三歳で天逝している。武智麻呂は仲麻呂の父であり、天平九年（七三七）に病死している。房前、麻呂、宇合の三名も相ついで病没した。仲麻呂三十二歳の時である。伝があったと伝えられる不比等は武智麻呂の父、仲麻呂の祖父である。

貞恵を別とすれば、これらの人々は藤原南家の直系の祖先である。その祖先を顕彰しようとしたものが「家伝」である。「家伝」は単独で成ったというより、仲麻呂の祖先への多様な顕彰事業の一つとして考えられよう。

天平宝字四年（七六〇）に不比等に淡海公が、武智麻呂と房前に太政大臣が贈られたのは仲麻呂によってである。また、「中臣氏系図書引延喜本系解状」には

さる天平宝字五年撰氏族志所の宣により勘造し進む所の本系帳を案ずるに云々

とある。「新撰姓氏録」の序には

宝字の末、その争いなほ繁し。よりて名儒をあつめ氏族志を撰ぶ。抄案半ばならざるに、時難あるに逢ひて、諸儒解体し輟めて興らず。

とあり仲麻呂が氏族志を企図しながら、彼の失脚とともに廃絶した事情がうかがわれる。

天平宝字二年（七五八）に孝謙、光明の漢風の尊号を贈ったり、正史の編纂を企図していたらしいことも知られている。

「家伝」は、いずれは撰氏族志所へ提出されるべき藤原氏の本系帳として成ったのであろう。仲麻呂が大師に任命されたのは天平宝字四年（七六〇）正月四日であり、大師が追記でなければ、鎌足伝はそれ以降の成立ということになる。「武智麻呂伝」も掉尾に

仲満は名を改めて押勝と曰ふ。仕へて大師に至り、爵は従一位に入りて、帝の羽翼と為り、天下を鎮め撫づ。

と、仲麻呂が大師となった記事が見え、同じく、天平宝字四年の正月四日以降の成立であろう。「武智麻呂伝」には、天平宝字四年八月七日の太政大臣追贈のことが見えないので、その成立の下限はここに置くことができよう。上巻の二伝についても、ほぼ同じ時期の成立と思わる。「家伝」は天平宝字四年の正月四日から、同年八月四日の間に成立したと推定される。

注1 東大寺要録巻第六末寺章第九。

2 本朝書籍目録。

3 旧伏見宮家蔵本、東大寺宗性抄出本。

4 扶桑略記第六和銅六年十二月の条に大職冠伝という名称で武智麻呂伝を引用。

5 二中歴巻四に淡海公伝からの引用が見られる。又、本朝書籍目録に淡海公一卷とある。

6 天平宝字二年（七五八）八月二十五日にこの称号の使用が定められた。

7 唐大和上東征伝。思託「大和尚伝」。正倉院文書、続日本紀天平宝字二年八月の条にもその名が見える。

8 堀池春峰「鑑真を廻る貴族の動向」大和文化研究八九。

9 藪田香融「惠美家子女伝考」上、史泉三二。
11 10 松の藤靡。
群書類従卷第六二。

二 家伝上 鎌足伝

「鎌足伝」は藤原鎌足の事績を漢文で記したものである。出生から死までを編年的に述べている。

全体を七段に分けて内容を略述する。

第一段は、鎌足の諱、字、本貫、父母など出自に関することと、少年時代の学問、旻法師の堂での話を記している。

鎌足の誕生に関わる

伝 初め大臣、はらにあるとき、哭声外に聞こゆ。十有二月に乃ち誕る。外祖母、夫人に語りて曰はく、「汝の児懷妊の月、常人と異なれり。非凡の子にして、必ず神功有らむ。」夫人心に之を異とす。まさ誕れむとするに苦しみ無し、覚えずして安く生る。

という異常出生譚が

大臣は性、仁孝にして、聰明叡哲、玄鑒深遠にして、幼年にして、学を好み、書伝に博渉す。

という観念的な頌辞とならべられている点を特色としてあげることができよう。頌辞の真实性を、類型的ながら異常出生譚を加えることによって保証していると考えられる。「仁孝にして、聰明叡哲、玄鑒深遠」という鎌足の衆人に絶する性質は、出生が、腹中の泣き声が外に聞こえたり、十二月腹中にいたりする常人と異なる話によって真实性を獲得している。出生の異常さは、無論「史実」の点か

らは意味を持たないが、「鎌足伝」全体に記される個々の事績の真实性をも保証する表現上の重要性を認めないわけにはゆかない。

吾が堂に入る者、宗我大郎に如くなし。但し公は神識の奇相にして、実に此人に勝らむ。願はくは深く自愛せむことを。

という「神識の奇相」の旻法師による発見も異常出生の「非凡の子」にとっては当然である。衆に秀れた蘇我入鹿をさえしのぐ力を鎌足が持つことを、新漢人旻——占術にたくみだった渡来僧——によって知らされることは第二段の鎌足による入鹿の誅滅へさらに展開する必然性を持つ。光源氏の生涯が高麗の相人によって予言され、物語の進行とともにそれが実現するというのと同様である。

第二段は、入鹿誅滅の前史である。舒明天皇の死、輕皇子との知遇、蹴鞠でぬげた皮鞋を拾ったことをきっかけにして中大兄と「魚水」の交を結び、董卓の暴慢に等しい入鹿の山背大兄の誅殺に「反正之謀」を中大兄と行ったと述べている。さらに山田臣と婚姻を通じて結ぼうとしたが、娘を弟武蔵につれ去られ、妹が代りになったこと。中大兄が武蔵を刑戮しようとするのを鎌足がとどめたこと。

鎌足が山田臣に入鹿誅滅の計画を述べ、共に兵をあげること。中大兄に鎌足が

吾が成敗は汝に在り。汝宜しく努力すべし。

と信頼され、佐伯連古麻呂、稚犬養連網団を大事を託すべき人物として中大兄に薦めたことが見える。

会話が多用されていることと、その会話の中で「理念」が述べられるのが表現上の特色である。

中大兄が、計略の成り難たく、帝を驚かすことは、臣子の理が義に合わない」と述べたのに対し、鎌足は

臣子の行は、ただ忠と孝のみ。忠孝の道は、国を全くし宗を興こすことなり。もし皇綱紊絶し、洪基頽壞せば、不孝不忠此に過ぎたるは無し。

と述べる。たとい、天皇を驚かすことになっても、国家や皇室が絶える不忠をおかさないために、入鹿を討つて真の忠孝の道を行うべきだという理念が鎌足の発言として述べられている。鎌足の行動を「忠孝」という理念により正当化し、また理想的な臣下像を造型する意図が、この段の特色である会話で表現されている。その理念により入鹿誅滅が実現する。

第三段は、入鹿誅滅の話の後段である。

三韓の上表を唱えたと詐つて入鹿を宮殿におびき出し、計略ももつて入鹿の剣を解き、宮中に通ずる門を閉ざし、中大臣、鎌足、古麻呂らが武器を持って隠れ、入鹿をうったことを述べる。次いで天皇の驚きと中大兄の奏上、豊浦の大巨蝦夷の自尽を伝える。中大兄が、頽運を復興したのは鎌足の力であるとしたのに対し、鎌足は、臣下としての分を守るように、

是れ聖徳に依り、臣の功に非らず

と答えたという。

この章段は、長くかつ詳細な記述が見える。「日本書紀」と共通の文章も多いが、三韓上表の時に入鹿の履が三たび廻つてはくことを得なかつた点などは書紀には見えない。

舎人をして急ぎて入鹿を喚ばしむ。入鹿起立して履くに、履三たび廻りて著けず。入鹿心に之を忌む。還りて彷徨せむとす。舎人頻りに喚びて、已むを得ずして馳参す。

入鹿の用心深さと、不吉な予兆、場面の緊張を伝える文章であ

る。入鹿の破滅を、履をはくことができない事で暗示している。「入鹿誅滅の物語」(仮称)を想定し、独自資料や道頭の「日本書紀」などを加えて鎌足伝が成ったとする横田健一氏の説がある程に、物語的な叙述をそこに見ることができよう。具体的な叙述をならべて話の展開を試しており、この段は「鎌足伝」中、最も精彩ある部分と言えよう。書紀にも見える

箱中の両剣を佐伯連古麻呂、稚犬養連網田に賜ひて曰はく、

「ゆめ^{注3}一箇にて打殺せよ。」水を送り飲まむとするに、咽りて反吐す。大臣使を責めて勤励せしむ。

なども、筋の展開から不要ではあるが、事を成す直前の息づまる緊張感をよく表現している。さらに、入鹿の誅殺を成しとげた叙述は古麻呂ら遂に鞍作を誅す。是の日雨ふる。潦水庭に溢る。席の障子を以つて、鞍作の屍掩ふ。

とある。書紀にもほぼ同文があるが、出水をとまなう激しい天象が事件の内容を凝縮して提示している。むしろで張つた屏風で被われた入鹿の屍が雨にうたれる様は、権勢を誇つた者の最後をみごとに表現している。単に事柄を伝達しようとするだけでなく、登場人物の心理や、場面の雰囲気までも読みとることができる表現である。

第四段は、中大兄の即位を鎌足がとどめ、軽皇子が即位し、中大兄は皇太子となったこと、大化と改元したこと、大錦冠を拝し、内つ臣を授けられたこと、更に大紫冠に移り増封にあずかつたことなど鎌足の業績を記す。詔を引用して、

社稷の安を獲たるは、まことに公の力による。

とか、

功は建内宿禰にひとしくも、位は末だ民の望を允さず。

とかの功績の公的な顕彰を集中的にのせる。

第五段は、白鳳十二年の百濟救援の西征の記事である。天皇の病氣回復を神祇、三宝に祈ったところ、観音が夢にあらわれたこと、貞恵伝の誄の作者、僧道賢の言が引用してあることが注目される。また、中大兄が鎌足を唐の魏徴をはじめ、高麗、百濟、新羅の名臣と比較して優れているとする話を伝えているのは「鎌足伝」としての特色である。

第六段は、中大兄が摂政となったこと、中大兄と鎌足との関係、治政の安定、近江遷都、中大兄の即位、近江の浜楼での置酒、新羅の金度信に船を与えたこと、律令の制定を記す。

伝

家

帝、群臣を召し浜楼に置酒す。酒酣にして歎極まる。是に於いて太皇弟長槍を以ちて敷板を刺貫く、帝驚きて大いに怒る。以ちて執害せむとす。大臣固く諫む、帝即ち之を止む。太皇弟初め大臣の所遇の高きを忌みき。玆より以後、殊に親しく之を重んず。後壬申の乱に値りて、吉野より東土に向ひしに、歎きて曰はく、若し大臣をしてあらしめば、豈吾此に至りて困らむや。

とあるのは、挿話によって、鎌足の顕彰をしようとする表現であるが、壬申の乱後の評価を保証するように、太皇弟大海人の言葉として語られている点は見のがせない。

第七段は、鎌足の病と死、天皇(中大兄)の歎き、仏への帰依、葬儀の様子、山階精舎での本葬、百濟人沙宅昭明による碑文の作成を記して本伝はしめくくられている。

鎌足伝は、類型的かつ修辭的な頌辭が決して少くない。それは漢文で書くことの熟達であらわれとして評価できると共に、^{注4}具体的な

事件の記述も豊富であり、挿話を対照することで頌辭の眞実性を獲得し、名臣としての鎌足を表現しようとしている。原資料の多様性に由来するのであろうが、文章の統一性に欠ける点はある。人物の一貫性は保たれている。常に最上の名臣として描こうという表現が伝すべてをたらぬいているからであり、その点で藤原家の始祖の業を顕彰する鎌足伝は、仲麻呂の今日において、漢文で書かれた新しい始祖譚であるといえよう。

注1 例としては懷風藻の太皇太子、大津皇子伝、家伝下をあげるべきであろう。相人による予言を方法化したのが源氏物語であろう。

2 「大織冠伝と日本書紀」、続日本紀研究五ノ九、一〇。

3 「箇」は助字で、しかも俗語的口語的用法で、上代人も時には使用していたかもしれないと小島憲之氏は指摘される。(上代日本文学と中国文学、下一四〇二頁。)書紀には「急須応斬」とある。

4 超越的な事績は、誕生、奇相、観音の示現などで、家伝下巻よりも少い。

三 家伝上 貞恵伝

「貞恵伝」が藤原仲麻呂の手になることは既に述べた。「貞恵伝」は二つの部分より成り、前半は仲麻呂の書いた伝であり、後半は道賢の書いた貞恵の誄とその序である。伝の最後に、

高麗の僧道賢誄を作りて曰はく、

とあっても、道賢の誄と序が、仲麻呂の書いた伝の二倍の長さを持つことから、道賢の誄と序を引用するのではなく、誄と序に伝をつけ加えて成ったというのが実態に近いであろう。ただし、伝記に、序に誄が続く形式を採用したのは、小島憲之氏の指摘のとおり、^{注1}威奈真人大村墓誌銘并序に類似はするが、新しい姿体であろう。

貞 惠 伝		作 品	作 者	成 立 時 期
誄				
誄	序			
道 賢				
白鳳十六年 (天智四年) (665)				
天平宝字四年 (760)				

それを示したのが右の図である。

貞恵の死は、誄の序によって

白鳳十六年歳次乙丑十二月廿三日に、春秋若干、大原の殿の下に卒せり。

伝と知られる。天智天皇四年(六六五)に相当する。道賢によって、貞恵の死の直後、誄と序が作られ、天平宝字四年(七六〇)年に、仲麻呂が、伝を前に付け加える形で、「家伝」の一部を成したのである。誄と序から「家伝」の完成まで九十五年を経ている。

「高麗の僧道賢」は、高句麗からの渡来僧である。道賢には「日本世紀」(逸文)という著作があることが知られ、^{注2}「日本世紀」の斉明紀、天智紀に引用されている。「日本世紀」の資料とされたらしく、当時の対外関係についての記述が多く、讖緯説の影響がうかがわれる。道賢自身、占術にたくみであり、天智紀元年には、^{注3}夏四月に、鼠、馬の尾を産む。釈道願占ひて曰はく、「北国の人、南国に附かむとす。蓋し高麗破れて、日本に属かむか」といふ。^{注4}と見える。

「家伝」の道賢の誄が「日本世紀」の逸文とする説もある。^{注4}た

だ、同書が「記事を年月にかけ、日にかけないのが通例」とすると、前掲の「白鳳十六年……」の記事には「十二月廿三日」という日にかける記述が見える。^{注5}

仲麻呂の書いた伝は、貞恵の性が聰明なことを述べ、次いで父鎌足が、貞恵に学徳を積まそうとして唐に留学させる経移を略述している。懷徳坊の恵日道場に住み、神泰法師によって、永徽四年、十一歳で和上になったこと、十余年の間おこたらず、内経外典に通じ文章と書に優れていたこと、白鳳十六年に百済經由で帰国したことを記す。次の文で仲麻呂の著した伝は終わり、道賢の誄と序へ続く。

その百済にありしの日、詩一韻を誦せり。その辭に曰く、
「帝郷は千里を隔て、辺城は四望秋なり」といへり。この句警絶なれば、当時の才人も末を續ぐことを得ず。百済の士人、窃にその能を妬みて毒すれば、その年の十二月廿三日をもちて、大原の第にて終りぬ。春秋廿三なり。道俗涕を揮ひ、朝野心を傷みつ。

道賢の序には

居ること幾ばくならずして疾にふし、續微かなり。^{注6}

とあって、毒殺である事情を伝えない。誄もそれを明らかにしていない。伝の特色は、貞恵が毒殺であったか否かという事実関係だけではなく、その文才が百済の人士に妬まれ毒殺される程であったという表現をとることであろう。

帝郷千里隔、辺城四望秋。^{注6}

が「警絶」なのは、「当時の才人も末を續ぐことを得」なかったからであろう。句をつぐことができない程の文才を持つ人は、不吉な

運命を背負うという觀念が背景にあるようだ。当時の才人に卓絶した才能、日本人よりも中国詩に精通しているであろう百濟人の嫉視を買う程の文才と、あまりにも若い、しかも悲運の死が結びつけられていることが、表現の点での特色であり、未来に開かれていたはずの貞恵の才を強くおしむ気持を表出し得ているのだ。

すぐれた文才と横死との結び合わせは、「懷風藻」の大友皇子の伝に

筆を下せば章と成り、言に出だせば論と為る。時に議する者、其の洪学を歎かふ。未だ幾ばくもあらぬに、文藻日に新し。壬申の乱に会ひて、天命を遂げず。

とあるが、文才そのものが死の原因であるわけではない。また同書の大津皇子の伝には、

その良才を蘊^つみて、忠孝を以ちて身を保たず、此の奸豎に近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。

とあり、これも「良才」をもっていることが、ただちに不運の因であるとは述べていない。ただ「七言。述志」が、後人の聯句を持つ詩であることは注目される。

天紙風筆雲鶴を糸がき、山機霜杼葉錦を織らむ。

後人聯句

赤雀書を含む時至らず、潜龍用ゐること易く、未だ寝も安みせず。

聯句は、^{注7}漢武帝の柏梁体の詩に始まり(文心彫龍、明詩)、六朝詩に例がかなり多く残るといふ。前掲した大津皇子伝にもあるような悲運と結びつけられたのが、「述志」の断章であり、後に「後人」の追加が加えられて入集したと考えられないだろうか。「貞恵伝」の断

章と人間の運命の関係の表現をここにも見い出せるのではないか。

伝に対して、道賢の誄とその序は、誄という様式のためか、死の同時性を持ったためか、事情を細叙することが少ない。誄は序よりなおその傾向が強い。それに随って、典故を持ち装飾的な傾向も強い。

序は、まず鎌足への讚美、貞恵の学問への造詣、帰朝、病死を述べる。序の約半分を鎌足への讚美に費やしている。

紫闕に糸綸する者は、賢を薦むるをもちて本と為し、宗室を緝熙する者は、忠を挙ぐるをもちて先と為す。

と鎌足は、国家と天皇との関係で讚美され、その子として貞恵は死を惜しまれている。伝には見えない点である。

帰国についても

聖上命を錫ひて、幸く舎に就くことを蒙りぬ。

と天子の徳により、無事帰国できたかのような表現をとるのである。

誄は、四言五十五句より成る。典故を使った言葉を用いたため、事柄を述べる点で内容は稀薄であることは既述のとおりである。

誄はまず鎌足をたたえ、その偉大さを

これ岳これ海、城のごとく^{ほび}郷のごとし

とたたえ、貞恵の誕生を「積善の余慶」として鎌足との関係で述べている。入唐について、学識が優れているのを

荆山玉を抱きて、弁氏規を申べ、漢水珠を蔵して、竜子随に報ゆ。

と典故を羅列し、抽象的、一般的に顕彰する表現をとり、伝の部分の、誰も貞恵の詩をつぐことができなかつたという挿話を用いた具

体的な表現と対極をなす。

誄では、貞恵の死は、堅固なるべき国家に奉仕する人間のはかなさとして、典故をふんだんに使う表現をとる。

世路は芭蕉のごとく、人間は闔城のごとし。風藤絶え易く、蛇篋停めがたし。蘭之春に萎み、松竹夏に零ち、鳳は繳射に遭ひ、鸞は網刑に掛れり。

貞恵の個別性ではなく、蘭芝や松や鳳や鸞といった優れたものの時ならぬ死という比喩の連続の中で死が悼まれる。

三度繰り返される「嗚呼哀しきかも」の定型句に示されるように道賢の誄は、中国六朝の誄を踏襲して作られたものであり、以上述べた表現の特色も、またそれと共通のものである。

家 伝 誄と序からは、知ることのできない具体的な事情——死因や渡唐帰国の年月など——を伝として仲麻呂が補足して貞恵伝が成ったのであり、文才と人間の不運とを結びつける表現も、表現の具体性を求める営為のうちになったと考えられる。

注1 上代日本文学と中国文学、下一四〇四頁。

2 日本古典文学大系日本書紀、下五七八頁。

3 書紀、鎌足伝には道頭とある。

4 注1に同じ。

5 注1に同じ。

6 懷風藻、宇合詩に、日下皇都君抱玉、雲端辺国我調絃と帝里烟雲乘季

月、王家山水送秋光とある。

7 日本古典文学大系懷風藻、七七頁。

8 小島憲之氏は、全体として懷風藻の詩などに比べてすぐれ、紙筆によく哀悼の意が表われ、作者の文才を思わせるに十分であると述べておられる。上代日本文学と中国文学、下一四〇八頁。

四 家伝下 武智麻呂伝

藤原武智麻呂の生涯を編年的に漢文で記した伝が「家伝」下巻である。鎌足伝よりも更に整然とした文章であるのは、鎌足伝のように書紀の文章を下敷きにしなかったことによると小島憲之氏は述べている。構成の点からも、単なる編年ではなく、官位の変遷を主とした形で述べられ整然としている。それだけに劇的な事件に欠け、平板な印象を受けるが、逆にそれが律令官人の典型的表現としてふさわしいと評価もできよう。

伝は、諱、父母、出生、名義、母の死、に次いで武智麻呂の性質を述べるが、「性温良」などとならんで、

毎に恬淡を好みて、遠く憤閑をさる。或る時には手談(困菴)して日を移し、或る時には披覽して夜を徹しぬ。

という隠逸的傾向を美点の一つとしていることに注目したい。大神高市麻呂や藤原麻呂、八束らに見られるように、律令制を支える儒教の対極で成熟してゆくのが老荘を基とする隠逸世界への憧憬であるからだ。しかも、儒や仏への尊崇と並列的であり、矛盾を生じない点は武智麻呂伝にもれない。

穂積皇子が宴で、武智麻呂の奇才を見いだす話、小治田志毘の慨嘆などを記し、諸官の歴任の記事が続く。中判事、大学助、図書頭兼侍徒、近江守になったことが、年記をともなつて記されている。官人としての順調な昇任をうかがわせるだけでなく、その各職についての武智麻呂の功績が紙幅をさいて述べられている。

四年三月拜して大学助となる。(略)公、学校に入りて、その

空寂たるを見てもへらく、それ学校は賢才の聚る所、王化の

宗とする所なり。国を理め家を理むるは、皆聖の教により、忠を尽し孝を尽すは、この道にしたがひ由る。今学者散れ亡せて、儒風扇かず。これ聖の道を抑揚し王化を翼賛する所以に非ずとおもへり。即ち長官良眞王と共に陳べ請ひて、遂に碩学を招き、経史を講説せしめつ。泱辰の間、庠序さかりに起こり、遠近の学者、雲のごとく集り、星のごとく列なりて、諷誦の声、洋洋として耳にみり。

制度の荒廃という現状(A)が示され、制度のあるべき姿、理念(B)が対置され、武智麻呂の功によってその理念が実現(C)されるという形で、判事では訴訟制度、大学助では学校と積奠、図書頭では官書の整備、近江守では悪政の改善や勸農、寺の復興を記す。各官職における最上のあり方が武智麻呂によって示される。が、いずれも制度の「復興」にかかわるもので、制度そのものを作る「創業」の功ではない。それは「家伝」における「武智麻呂伝」の表現が、始祖としての「鎌足伝」や、伝は佚書となった不比等の功業と対照されるときに、当然とるべき顕彰の方法だったのでないかと思われる。藤氏中興の位置と制度の復興をはかることが重ねられた表現である。他の記事をはさみながら、霊龜二年の式部大輔、養老二年の式部卿、それに続く、東宮傳、造宮卿、播磨守兼按察使、大納言―習宜の別業の記述をはさんで―天平三年の大宰帥の兼任、天平六年の右大臣就任まで、記述の精粗はあっても、先述した形式をそれぞれについて繰り返して叙述が進んでゆく。それらは、「文」に関する記述ばかりで、「武」に関する記述は後述する伊福山での逸話をあげるに過ぎない。入鹿誅殺に筆を尽す「鎌足伝」に対して、「武智麻呂伝」は文官としての理想像を描き出そうとするもの

である。

近江守の時の寺院の再興に続いて、伊福山登山、神劍の奉獻、比叡の柳樹の話、神宮寺の建立が霊龜二年の式部大輔の就任の間にさしはさまれている。柳樹の話は和銅八年の従四位上に叙された記述に続くもので例外とすれば、他の三話は年月の記述を欠く点だけでなく、他の官職についての記事にみられなかった「超越的」な事柄を伝えている。

伊福山登山の話为例にとろう。山川に目をとどめた武智麻呂は伊福山の頂に登って、「瞻望」したいとのぞんだが、土地の人は疾風、雷雨、雲霧にみまわれ、蜂の群れにおそわれ、東国のあらぶる鬼神を調伏した倭武皇子でさえ山中で神に殺されという。武智麻呂は、若いときから鬼神をあなづることがなかったから、神はそれを知って危害を加えないであろうと言った。潔斎して山に登る記事が続く。

行きて頂きに至らむとする間、勿ち兩つの蜂あり。飛び来りてささむとす。公袂を揚げ掃ふに、手に随ひて退き帰りぬ。従者曰く、德行神をうごかして、あへて害はるる者なしといへり。終日、優遊し徘徊りて瞻望す。風雨共に静かにして、天の氣清く晴れたり。これ公の勢力の致すところなり。

伊福山に登ろうとする武智麻呂に土地の人が、東国の鬼神を調伏した倭武皇子が神に殺されたと伝えることによって、武智麻呂の倭武皇子への優越が表現されている。しかも、「武」をもって聞こえた倭武皇子を、武智麻呂が

あへて鬼神をあなづらずという「德行」によって優越しているのは見のがせない。伊福山の

神(岡つの蜂)が武智麻呂を害さなかったことにより、「德行」による優越が証明されるばかりでなく、伝全体に見える、

礼に非ざれば履まず、義に非ざれば領めず、

という頌辞、仏教への尊崇、釈迦にあらわれる儒教の尊重などに真实性を与えている。やや仏教への傾斜は見られるにしても、儒、神と並列的に尊敬の対象となっているのは、武智麻呂が越前神宮寺の創建者に擬せられており、すべての徳を兼ねた人物として表現されることと同根であろう。

国見とも思われる伊福山の登山の話は、武智麻呂伝の中で異質なのは既に述べたが、その異質さは、この話が神判を基本としていて神話の色彩を濃くとどめていることによる。しかも倭武皇子との比較で武智麻呂の優越はいっそう強調されている。この話は神話の論理によって真实性が獲得されている。この話が、諸官歴任の記事にさしはさまれることによって、それぞれの官職を完璧にやりとげる武智麻呂の官人としての優越を保証しているのではないか。単に年記を記すことによってではなく、荒唐とも思える記事に見られるより古い神話の論理を通じて、「武智麻呂伝」は表現における真实性を持つとしている。

「武智麻呂伝」は、病死、葬儀、豊成、仲麻呂の小伝を付して終る。

「武智麻呂伝」は、生々とした人物を描き出しているとは言えないが、官職歴任の記事を続け、超越的な話を加えて真实性を獲得し

て、律令官人の理想像を表現している。藤原氏の中興としての顕彰は右の方法によっている。

注1 上代日本文学と中国文学下、一四〇三頁。

2 鎌足伝等の記述に似るが、見者が穂積皇子であり、渡来人でない点異なる。

3 記紀は猪であり、蜂では神話的な想像力に欠ける。この変化が表現史上の新しさを示すか。雄略記(紀)には蛇が見えるが。

4 神話に根をもつ文官的な対応であり、これも表現史上の新しさを示す。

五 結

「家伝」は、「新興」氏族である藤原氏の新しい始祖譚「鎌足伝」と、藤氏の中興で、官人として制度の「復興者」の理想像を記す「武智麻呂伝」から成る。これに制度の「創設者」としての不平等の散逸した伝が加えられれば、仲麻呂の祖先の功業の顕彰の意図はより明確となろう。「貞恵伝」は異常な死により「鎌足伝」に付載されたものであろう。

上述したように、理念的、抽象的な叙述と挿話——ともに中国文学に学んだものであるが——を対置してゆく表現が行われて、個別性が表現されるまでには至らないにしても、典型として真实性をもって「伝」が人物を表現し得ているといえよう。

八世紀半ばの表現の水準の高さは、「家伝」にうかがうことができるであろう。